

マルグリット・デュラスと植民地

——『愛人』と『フランス植民帝国』のあいだ——

芦川 智一

マルグリット・デュラスには、彼女が作家となる前に本名であるマルグリット・ドナデューの名で発表した唯一の著作がある。フィリップ・ロックとの共著として1940年に刊行された『フランス植民帝国』（Philippe Roque, Marguerite Donnadiou, *L'Empire français*, Gallimard, 1940）である。

大戦のさなか、ドイツの脅威が迫るなかで書かれたこの『フランス植民帝国』で、彼女は誇張とも思えるまでにフランスの植民地主義を礼賛する。本人も公言しているように、一貫して左翼作家として知られるデュラスが、そして何より当時の仏領インドシナに生まれ、その現実を知るはずのデュラスが、植民地主義を礼賛する著作に著者のひとりとして名を連ねていることは、のちのその作家としての営為を併せて考えれば興味深い事実といえよう。

『フランス植民帝国』は、その存在こそ知られてはいるが、これ自身について語られることはきわめて少ない。デュラスも終生、これについては曖昧ともいえる態度をとり続ける。

「ガリマールと話してみるべきかもしれません。『反動的作品』という副題をつけてもいいでしょう。おもしろいかもしれない。あれは、嘘でもあるんです。あれは、当時のフランス植民地の単なる描写なんです。私はその頃、植民地省のジョルジュ・マンデルの官房で働いていましたし。もしあの本が見つかったら、ロラン・バルトの本と同じくらい退屈かもしれません。どこにも想像力が介入していないのですから。だけど、みんなまた、私が誇張してるっていうんでしょね。^①」

これは、1992年に「ル・ヌーヴェル・オプセルヴァトゥール」誌のインタビューのなかで、『フランス植民帝国』の再刊の可能性を問われたデュラスのこ

とばである。

このインタビューの中で、デュラスは、『フランス植民帝国』の再刊にあたかも前向きな態度を示してはいるものの、彼女の存命中にこれが再刊されることはついにない。この著作について語られることが（とりわけ彼女の存命中に）少ないのは、デュラス自身のこうした態度とも関わりがあるのかもしれない。

いうまでもなく、『フランス植民帝国』は、デュラスが作家となる以前に書かれたものであり、いわゆる小説作品とは異なる。また、彼女ひとりの手によるものではない以上、これをデュラス作品として扱うことには、私としてもためらいがないわけではない。だが、この著作に目を通し、執筆に至る経緯や当時の状況を知れば、デュラスがこのような本の著者に名を連ねたことの背後にあるものに思いを至らせずにいられないし、さらにいえば、この『フランス植民帝国』のなかには、のちのデュラス作品との関連において見過ごすことのできない点が数多くあり、デュラスの作品世界の成立を考える上で大きな意味をもつものといえるのである。

私は、ゆえに、この著作を詳細に分析することで、デュラス作品を読む上で新たな視野を手にすることができると考える。

『フランス植民帝国』の執筆、公刊に至るまでの経緯や、当時の状況を整理しながら、デュラスが、なぜこの著作に著者として名を連ねたのかについて考えてみたい。

ロール・アドレールによる伝記『マルグリット・デュラス』（1998年）が、これについては多くを教えてくれる。これは、綿密な調査に裏打ちされた労作であり、デュラスの存命中に公刊された二冊の伝記（アラン・ヴィルコンドレ『デュラス』とフレデリック・ルベレー『デュラス、あるいはペンの重さ』）と比べてもその実証的な価値においてはるかに勝る。

これによれば、デュラスことマルグリット・ドナデューは、1938年7月9日に植民地省に臨時職員（Auxiliaire）として入省している。彼女が就職先として植民地省を選んだ理由は定かではないが、アドレールは、以下のように推測する。

彼女の母親は、インドシナで現地人向けの学校の教師をしていたが、定年となる年齢を過ぎたのちもこれを続けるべく関係する諸機関への働きかけに奔走していたらしい。現地の行政府とパリの植民地省とのあいだで交わされたおびただしい数の書簡がそのことをあかす。母親は、パリにいた娘マルグリットを植民地省との仲介に使っていたらしい。「母親は、要求を〔植民地省の〕パリの事務所に娘を使って仲介させていた。娘は植民地省との仲立ちをしようとするが徒労に終わる。彼女が植民地相とはじめて出会ったのはこのときであったのだろうか。²⁾」

彼女は、植民地間情報文書課（Service intercoloniale d'information et de documentation）に配属される。ここで、主として内部向けの資料の執筆にあたり、文才を示したようだ。その結果、（のちのデュラスである）マルグリット・ドナデューは、植民地に関する「政治的な文書」を準備するように指示される。

ここで大きな役割を果たすのが、『フランス植民帝国』の共著者となるフィリップ・ロック、そして当時の植民地相ジョルジュ・マンデルである。ロックはドナデューの直接の上司にあたり、その文才を最初に見出した人物である。ロックはマンデルの片腕といえる存在でもあり、マンデルはおそらくロックを通じてドナデューの文才を知ったのだろう。

いくつかの部署を経て、1939年5月1日に情報文書課に戻ったドナデューに与えられた任務は明確であった。すなわち、「上司であるフィリップ・ロックとともに、また植民地相の側近で、歴史家であり、また、翌年ガリマール社から『没入』*La plonégée*と題した小説を出すことになる小説家でもあるピエール・ラフュの助力の下に、植民地帝国の徳と偉大さについての作品を構想³⁾」することである。

作業は、ドナデューが草稿を執筆し、ロックが修正を加える形で進められたようだ。つまり、ドナデューは『フランス植民帝国』全体を、あとからの修正はあるにせよ、執筆していたことになる。これが確かなら、一定の留保はせざるをえないものの、『フランス植民帝国』をデュラスの手によるものとして扱うことにもある程度の妥当性があるといえるだろう。

『フランス植民帝国』は、ガリマール社からロックとドナデューの共著とし

て、1940年4月25日に刊行される。ピエール・ラフユに献呈されている。マンデルによる序文が予定されていたが、これは実現しない。初版は6,300部。そのうち3,000部を植民地省が買い上げている。一般的な反響はないに等しい。

『フランス植民帝国』の目的とするところはきわめて明確である。

「この本にはたったひとつの重要な目的しかない。フランス人たちに彼らが海外に広大な領土を有しているのだと教えることである。なぜなら、フランスは一億一千万の人口を擁する帝国であるにもかかわらず、そのことをつねに十分に知っているわけではないからである。フランスは、しばしば、あたかも、[自身が] ヨーロッパのなかでもっとも豊かでもっとも美しい国のひとつではあるにせよ、その一国にとどまるかのように、これからのちももっとも多くの人口を擁し、もっとも広大な国となることはないかのように、語り、考え、行動している。⁽⁴⁾」

『フランス植民帝国』は、以下の五章から成る。第一章「植民地拡張とフランスの歴史、あるいは欧州の均衡なしに帝国はなし」、第二章「世界のなかのフランス植民帝国」、第三章「帝国—軍事力」、第四章「帝国—経済力」、第五章「帝国—精神の共同体」である。ここからも分かるように『フランス植民帝国』は、植民地獲得の過程、つまり植民帝国の形成の歴史を描き、その上で、いくつかの分野についてその現状を描写するという構成をとる。ここで描き出されるのは、フランス人が自らに課した未開の人々の「文明化」という使命⁽⁵⁾、および文明化された植民地の人々が示す本国フランスへの帰属意識、同化への熱意、さらにはこの植民地帝国の一体性、均一性である。「断片的なイメージに対して、この本のあるページは、これを有機的な統一性のイメージへと置き換えることを目指す」「ひとつの帝国のみがあるのであり、古めかしい言い方を借りるなら、それは唯一にして不可分なのだ。⁽⁶⁾」

植民地省が主導して書かれた政治的なプロバガンダである以上、誇張した植民地像が展開されるのは自然なことだろう。それにしても、のちに作家デュラスとなる人物が、ここで展開されるあからさまな植民地主義礼賛を書いたという事実には、やはり違和感を禁じえない。グザヴィエ・ヤコノ『フランス植民地帝国の歴史』（平野千果子訳、文庫クセジュ、白水社、1998年）などを引く

までもなく、フランスの植民地拡張の過程、数次にわたる植民帝国建設の過程は一貫性を欠く。植民地はつねにフランス本国の政治、経済の事情に左右されてきた。今なお海外県、海外領土といった区分が存在するのはこのためでもある⁷⁾。また統治機構や統治そのものが、しばしば本国からの政令に基づいていたため、フランスの植民地支配は、こうした面でも、時期によって、また各植民地間で一貫性を欠いていた。

現地人の蜂起や叛乱はつねにあったし、彼らに本国フランスへの帰属意識など期待するべくもなかった。(フランスへの「同化」を強く求めた地域があったことも確かではあるが求められていたのはあくまでも「権利上の」同化である。) インドシナ生まれのドナデューが、こうした現実を知らないはずはない。ましてやインドシナは、ほかのフランスの植民地に比べて、一貫してフランスへの同化よりも独立への指向が強かったところである。第二次大戦後、フランスの植民地のなかで真っ先に独立を勝ち得たのもインドシナであった。

ドナデューを含む「著者」は、このとき、植民地に何を見ていたのだろうか。

『フランス植民帝国』が書かれた当時の政治・社会状況がひとつの鍵になるかもしれない。具体的には、ドイツの脅威であり、これについては本の中でも明言されている。

「ところで、この本は、このような重要な任務の助けとなるように宿命づけられている。これを読むことを通じて、ひとつの確信を引き出していただきたい。つまり、帝国が形成された。戦争がこれを完遂した、ということである。もしこれまで、このことが、ほぼつねに論議の対象でしかなかったとしても、ドイツの脅威と民族主義の教義が、それが現実のものであるという決定的な意識を与えたのだ。⁸⁾」

『フランス植民帝国』が刊行されたのは、すでに述べたように、1940年4月であり、パリがドイツ軍の手に落ちる二ヶ月ほど前のことでしかない。「ドイツの脅威」はすでに現実のものとしてそこにあった。刊行から間もなくパリは占領され、親ドイツのヴィシー政権が樹立される。やがて、1942年にはフランスは全土が占領下におかれる。フランスは、まさに危機に瀕していた。あるいは

は、ドナデュー、ロック、そしてマンデルらは、植民地にこそ「フランス」の未来を見ていたのだろうか。実際、ド＝ゴール率いる反ドイツの「自由フランス」は、「徐々に植民地をみずからの陣営に引き込み、フランス解放の大きな基盤として⁹⁹⁾いく。「植民地帝国は、ヴィシー政権の政策にも大きな比重を占めていたが、実際にはド＝ゴール派勢力に実質的な支持をあたえることで、自由フランスの基盤そのものを構成していたともいえる。まず、1940年10月27日、コンゴのブラザヴィルで「植民地防衛評議会」が設立されたが、ド＝ゴール将軍はみずからその権限を担うことを表明し、「祖国解放のために、すべての領土で全面的に戦争を遂行する」ことを宣言した。¹⁰⁰⁾」

むろん、こうした動きは、『フランス植民帝国』の刊行ののちに起きたことであり、これが執筆されていた時点で、これらの動きがどの程度まで顕在化していたのかは明らかでない。ただし、ド＝ゴールは、パリが陥落する前から、フランスの正規軍を植民地に移すことを考えていたらしい。実際、1940年6月18日の英BBCにおける有名な演説のあと、わずか四ヶ月ほどで植民地防衛評議会の設立にこぎ着けていることを考えれば、水面下では何らかの動きが進んでいたと考えるのが自然だろう。こうした国外レジスタンスの動きに、マンデルやロック（およびドナデュー）の属した国内のレジスタンスがどの程度通じていたのかは定かではない（両者の直接的な連携は、1943年まで待たなければならぬ）が、この時期、対独抵抗派のなかに、植民地に活路を見い出そうとする共通の認識があったことは、ひとつの可能性としては考える。

植民地を重視する姿勢は、標題となった*empire français*という語からもうかがうことができる。

この語は、しばしば「フランス植民帝国」あるいは「フランス植民地帝国」と訳されるが、いうまでもなく、この語自体のなかに「植民」や「植民地」を意味するものはない。この語が、フランスでもっとも盛んに使われたのは、一般的には第二次大戦後であるとされているが、平野によれば、1890年ごろからすでに使われており、二十世紀初頭の学校教科書のなかにもみることができるといふ。『フランス植民帝国』が書かれたときには、すでに一般的に認知された語であったようだ。これが、植民地帝国主義の覇権を争ったイギリス（大英

帝国)への対抗意識に裏打ちされていることはいうまでもない。ただし、革命を経てすでに共和制を実現した、国王を戴くわけではないフランス国家が、「帝国」empireであるためには、それは、海外に広大な領土をもつ植民地帝国でなければならず、この語は、十九世紀末から二十世紀前半にかけての植民地帝国主義の時代には、実際に、そうした負荷を担わされていた。(わが国において、このempire françaisという語が、いつ頃から「フランス植民地帝国(あるいは植民帝国)」と訳されるようになったのか、私には、今のところ十分につまびらかにすることはできないが、その内実を考えれば、適切な訳語といえよう。)

こうした語を標題に掲げていることが、『フランス植民帝国』の著者たちの植民地に向けるまなざし的一端を明らかにしているといえるだろう。

さらに、『フランス植民帝国』が、しばしば、マンデルの業績に言及しているのも興味深い。

「軍事上の要請から、ジョルジュ・マンデル氏は、近年、この[サハラ砂漠を横断する]道路の完成を急ぐことに尽力した。北アフリカが攻撃を受けたときには、黒アフリカ全体が、このサハラを横断する道路を使って救援に向かうことになるだろう。帝国の三つの幹線道路は改修された。[…]⁽¹¹⁾」

植民地省の主導で書かれたプロパガンダという性質をもつこの著作が、ときの植民地相の業績を称賛するのは不思議なことではない。むしろ当然のことだ。ただ、同時代の視点と現在からのそれとが自ずと異なるのはいうまでもないにせよ、フランスの植民地史のなかでそれほど突出した存在とはいえないマンデルが、ジュール・フェリーらに混じって、一度ならず言及されることには、あくまでも現在の目から見ればではあるにせよ、違和感がある⁽¹²⁾。

マンデルは、すでに閣僚経験もある有能な政治家であり、植民地省という比較的マイナーな省に任命されたことは、はじめは意に沿わなかったらしい。それでも、彼は植民地行政の改革を積極的に押し進めてゆく。『フランス植民帝国』の出版もその一環であった。彼は、パリがドイツ軍の手に落ちたのちは、対独抵抗運動に身を投じる。1944年にドイツ軍に捕らえられ、パリ近郊に連行されて殺害される。

『フランス植民帝国』の共著者であるフィリップ・ロックは、ドナデューとほぼ同時期に植民地省に入省している（正確には、1938年7月20日で、入省自体は彼女よりもやや遅い）。ドナデューよりも四才年長である彼は、同じく情報文書課に配属され、彼女の直接の上司となる。マンデルの片腕的な存在であった彼もまた、のちに対独抵抗活動に加わり、執筆活動を放棄する。1943年2月ごろドイツ軍に捕らえられ、命を落としている。

占領下のパリでドナデュー自身が、対独抵抗活動に加わっていたことは改めて指摘するまでもない（この時期のことについては、1985年に書かれた『苦悩』に詳しい）。

ドナデューの文才を見出し、書くという「天職」に結びつけたのはロック、およびマンデルであると、アドレールは推測する。彼らのあいだには、こうした対独抵抗活動へのかかわりにも見られるように、この時期、強い精神的な結びつき、『フランス植民帝国』の章のひとつを借りていうなら「精神の共同体」とでもいうべき結びつきがあったのかもしれない。そして、彼らのまなざしの先には、危機に瀕したフランスの未来を託すべき希望として植民地の存在があった、とひとまずは、考えることができるだろう。

植民地の現実を知るドナデューが、なぜ、現実を糊塗するかのようなプロバンガンダの執筆に手を染めたのかという問いは、おそらく、簡単に答えの出せるものではないだろう。これは、のちに作家デュラスとなるドナデューのフランスという国家への帰属の問題とも関わる。結論は、彼女の作品や、彼女自身のさまざまな発言、そして後述するIMEC資料などの丹念な掘り返しを待つべきであり、私にとっても、これは今後の大きな課題とすべきものである。

マンデルについては、近年、相次いで二冊の伝記・評伝が刊行されている。（Bernard Favreau, *George Mandel ou la passion de la république*, Fayard, 1996; Nicolas Sarkozy, *Mandel*, Grasset, 1997）マンデルと植民地の関わり（彼の植民地にかける情熱がどれほどのものであったのか）、植民地史における位置づけについても、今後の課題としたい。

『フランス植民帝国』における植民地主義の礼賛は、『太平洋の防波堤』などの作品や、デュラス自身のインタビューなどにおける発言に見られる植民地

主義批判と対照性を示す。たとえば、『フランス植民帝国』は、現地の人々が熱意をもって道路建設といった植民地の事業に参加するさまを描いているが、一方、『太平洋の防波堤』が描くのは、同じ道路建設にかり出された現地の人々がおかれた過酷な状況である。

こうしたこと自体が、すでに興味深い点であることはいうまでもないが、『フランス植民帝国』は、いくつかのデュラス作品とのあいだに明確な連関を示す。

以下に引くのは、『フランス植民帝国』のなかで、インドシナの現状に触れた一節である。

ショロンは、現代支那の発明品である「レストラン・ビル」immeubles-restaurants、絹と硬玉細工の店々、通りの喧噪tintamarreと夜毎のお祭り騒ぎで有名である。興味深いのは、サイゴンとショロンが、短い通りによって隔てられて、何らの点においても、街の作りや住民の生活において影響しあうことなく共存しているということである。⁽¹³⁾

続いて、1984年の『愛人』の一節を読んでみよう。

舗道には雑踏、それはあらゆる方向に向かって動く、ゆっくりと、あるいは活発に、それは人混みをぬって進む、捨てられた犬のように汚らわしく、物乞いをする人のように無分別だ、それが支那の人混みだ、今日の繁栄を伝える映像のなかに、私は、なおもそれを見出す […] 私たちは、何階もある支那のレストランへ行く。それは、建物immeubles全体を占めている。それらは大きな店、兵舎のような建物だ。それらは、バルコニーによって、テラスによって街に開かれている。⁽¹⁴⁾

街の音がこんなに近く、そばにあるので、それが木のブラインドにあたるのが聞こえてくるほどだ。あたかも、人々が部屋のなかを通り過ぎていくかのようにそれは聞こえる。私は、その音の、その通過のなかで、彼の身体をなでる。 […] ⁽¹⁵⁾

『フランス植民帝国』のなかのサイゴン近郊の中国人街、ショロン地区について触れた一節と、『愛人』において「私たち」、つまり語り手「私」と中国人の恋人が食事をとる「レストラン」について述べられている部分には、「レス

トラン・ビル」immeubles-restaurants（『植民帝国』）、「レストラン」「建物immeubles全体を占めている」（『愛人』）という共通する語彙が見られる。（「店」magasinという語もともに現れる。）また『フランス植民帝国』が、シヨロン地区の「夜毎のお祭り騒ぎ」について述べる部分と、『愛人』において、シヨロン地区の雑踏が描写される部分で、ともに「喧噪」（『植民帝国』）「街の音」（『愛人』）といった語に見られるように、「音」が重要な役割をはたしている点もまた注目に値する。

こうした一致はこの一ヶ所にとどまらない。このふたつの作品が、それぞれ、メコン川について述べた部分にも指摘するに値する一致が見い出される。

川は、土地や、さまざまな物を、水のなかに宙吊りにしたままen suspens dans ses eaux押し流してしまう。水量が最大になると、流れはよどみ、川はゆっくりと堆積し、ひとつの層を形作り、次の年には、そこを豊かな半水性の植物群が覆い、根づいてゆく。インドシナでは、そのなかでも、籐（とう）とマングローブが広く見られる種である。⁽¹⁶⁾

これに対して、『愛人』には、以下のような一節を読むことができる。

私は、いつも、バスが渡し船に着くとバスを降りる。夜でもそうだ。いつでも、私はこわいのだ。ロープが切れてしまうのではないか、海へと流されてしまうのではないかと。激しい流れのなかで、私は、私の人生の最後の瞬間を見る。流れはそれほど強く、すべてを運び去る。石や、大聖堂や、街丸ごとでさえ。川の水の内部では、嵐が吹き荒れる。嵐がもがいている。⁽¹⁷⁾

それは、やってきたものすべてを運び去る。土地の人々の住まいである小屋、森、消しとめられた山火事、死んだ鳥、死んだ犬、虎、水牛、溺れたもの、溺れ死んだ人間、狩りのためのおとり、ぴったりとくっついて鳥のようになった水性のヒヤシンス、こうしたものすべてが太平洋に向かっていく。流れるというほどの時間もなく、すべては、内部の流れの深く、目くるめくような嵐によって運ばれていく。すべてが川の力で表面に宙吊りにされたen suspens à la surface de la force du fleuveままで。⁽¹⁸⁾

このように、このふたつの作品は、四十年以上を隔てた、まったく性格を異にするテキストとは、にわかに信じがたいほどの共通性を示すのである。

このような一致は、ひとつには、『愛人』の作品世界の起源が、ここまでさかのぼれるということを示しているといえるだろう。また、このことは、『愛人』が一般にそう考えられているように、それまでの作品との「断絶」によって成立したわけではなく、むしろ、『愛人』でデュラスが示した（到達した）作品世界は、彼女の作家として営為の全体を通じて、徐々に準備されたものであることを示しているのかもしれない。

さらにいえば、これはまた、幼年期における植民地体験が、デュラスの作品世界にもつ意義の大きさを示すものであるともいえる。

デュラスが、その幼年期を当時の仏領インドシナで過ごしたことはよく知られているが、デュラスには、案外、植民地を扱った作品は多くない。長らく否認されていたデビュー作『あつかましい人々』と、これに続く『静かな生活』はともに、デュラスという筆名のもとにもなった、父親の家系が所有する地所のあるフランス南西部のロ・エ・ガロンヌ県を舞台としている。『静かな生活』から六年を経た戦後1950年に発表された『太平洋の防波堤』は、ふたつの大戦間のフランス植民地を舞台として、植民地行政の腐敗の犠牲となった「母親」や現地の人々の姿を描くことで、植民地主義を糾弾する、デュラスの小説作品のなかでは突出して政治性の強い作品である。このような作品が書かれたことと、当時の植民地をめぐる問題、とりわけアルジェリアの問題と無縁ではなかった。（だとすれば、この作品や、当時のデュラスの発言などからは、この時期のデュラスの、植民地の問題に対するスタンスも自ずと明らかになる。）そして、1977年に発表され実際に上演もされた、『防波堤』の戯曲への翻案『エデン・シネマ』、1984年の『愛人』、『愛人』の映画化のために書かれたシナリオをもとにした1991年の『北の愛人』といった作品を除けば、植民地を扱った作品はほとんどないといっても過言ではない。しいて挙げるとすれば短編「ボア」や、「インディア・ソング系列」などと呼ばれる一連の作品（『インディア・ソング』、『副領事』など）があるが、たとえば『インディア・ソング』が描く植民地は、「デュラジア」と呼ばれることもある、「架空の」とでもいう

べきアジアの植民地である。

ここでの主要な関心の対象である『フランス植民帝国』と『愛人』というふたつの作品を隔てる時間は、ほぼそのまま、デュラスの作家としての営為と重なる。このことを思えば、デュラスの植民地体験、そして、『フランス植民帝国』から『愛人』へと至る道程は、つねにその作品世界の背後にあって、それを支えていたのだと、さらには、いつか表に現れる期をうかがっていたのだということもできよう。こうした視点を軸として、デュラスの作品を問い直すことの意義は小さくはないはずである。⁽¹⁹⁾

このふたつのテキストのあいだにある共通点を考えると、『フランス植民帝国』は、作家デュラスの、その作品世界の起源にあるひとつの大きな「謎」のようなものであるのかもしれない。ロール・アドレールは、ジョルジュ・マンデルとフィリップ・ロックが、のちのデュラスであるドナデューを「書くという天職」に導いた、と述べているが、『フランス植民帝国』がもつ意義を考えると、これは単に、書くことを漠然と夢見るひとりの若い女性を出版というシステム、職業作家という生き方の入り口へ導いた、という以上の意味をもつかもしれない。

『フランス植民帝国』という著作から、デュラスの作品、そしてデュラスの作家としての営為において、その植民地体験がいかなる意味をもつのかを明らかにすること、それが、私にとっての課題である。これには、前述したように、多くの資料の丹念な掘り起こしが求められよう。デュラスの作品、インタビューなど公的な場面での発言はもとより、私的な領域での彼女の内面の遍歴にも関心をもたざるを得ないが、前述したIMEC資料群がここで大きな役割を果たすことになろう。これはデュラスが晩年になって寄贈することに同意した「十六箱からなる」資料であり、ここにはいくつかの作品の草稿をはじめとして、書簡や日記など、個人的な記録を多く含んでいる。⁽²⁰⁾

ひとまずは、『フランス植民帝国』と『愛人』のあいだにある参照関係を軸として、デュラス作品の読み直しを試みつつ、こうした個人的な資料も可能な限り視野に入れて、作家デュラス、そしてデュラス作品に新たな光を当ててゆきたい。

註

- (1) « Les nostalgies de l'amante Duras » (entretien avec Jean-Louis Ezine), *Le Nouvel observateur*, n° 1442, 25-31 juin 1992, p.55. このころ、長らく絶版状態になっていた「否認された」デビュー作『あつかましい人々』がフォリオ版のひとつとして再刊されたばかりであった。インタビュアーの関心が同じように長く未刊状態になっている『フランス植民帝国』に向けられたのはなかば必然だった。そして、このことは、『フランス植民帝国』という作品について、少なくとも、その存在はある程度知られていたことの証左ともいえよう。
- (2) Laure Adler, *Marguerite Duras*, Gallimard, 1998, Folio, 2001, p.194. ここではフォリオ版のページを示す。
- (3) *Ibid.*, p.198.
- (4) Philippe Roque, Marguerite Donnadieu, *L'Empire français*, Gallimard, 1940., p.9.
- (5) 平野千果子は、この「文明化」という観念こそがフランスの植民地獲得の原動力となったものであり、これが革命の理念とも親和性が高いものであったがゆえに今なお多くのフランス人が、かつての奴隷貿易や植民地支配といった歴史の負の面を清算しきれずにいるという。平野千果子『フランス植民地主義の歴史 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』、人文書院、2002年
- (6) *Ibid.*, p.10.
- (7) 前掲の平野『フランス植民地主義の歴史』によれば「大きくは、第一期植民地帝国の時代からフランス領であったところが海外県、第二期以降の地域が海外領土」(p.23.)に分けられるようだ。ちなみに第二次大戦後に成立したフランス連合においては、海外県は「ギアナ、グアドループ、マルティニク、レユニオン島」、海外領土は「サン・ピエール・エ・ミクロン、仏領大西洋植民地、ニューカレドニア・ニューヘブリデス仏領、仏領インド植民地、コモロ群島、マダガスカル、ソマリア仏領海岸、セネガル、モーリタニア、ギニア、スーダン、ニジェール、オート・ボルタ、象牙海岸、ダホメー、中コンゴ、ガボン、ウバングィ・シャリ、チャド」、ほかに連合領土として「トーゴ、カメルーン」、連合参加国として「ヴェトナム、カンボジア、チュニジア、モロッコ」(渡邊啓貴『フランス現代史 英雄の時代から保革共存へ』、中公新書、1998年)があった。
- (8) *Ibid.*, p.9.
- (9) ヤコノ前掲書、p.150. (=平野による訳注)
- (10) 同前、p.152.
- (11) Roque, Donnadieu, *Op.cit.*, p.92.

- (12) 実際、前述のヤコノも平野もその著書のなかで一度としてマンデルには言及していない。このことだけをもって、マンデルの植民地史における位置づけを云々することはできないが、その一端をうかがうことはできるだろう。
- (13) *Ibid.*, p.142.
- (14) Marguerite Duras, *L'Amant*, Minuit, 1984, p.59-60.
- (15) *Ibid.*, p.55.
- (16) Roque, Donnadieu, *Op.cit.*, p.107.
- (17) Duras, *Op.cit.*, p.18.
- (18) *Ibid.*, pp.30-31.
- (19) 四十年以上の時間を隔てた、しかも性格のまったく異なるこのふたつのテキストを、直接、比較・検討することには、確かに、ある種の危うさがつきまとう。しかも、『フランス植民帝国』は、のちのデュラスであるドナデューがその全体の草稿を執筆しているとはいえ、あくまでも「共著」として発表されたものであるのだから。この点については、どれほど慎重になってもなりすぎることではないだろう。
- (20) IMEC資料については佐藤浩子氏から貴重な情報を得ることができた。